阿波野青畝著『掌俳話』Vol.5

13.
俳句は目で鑑賞するのか、耳で鑑賞するのか、こういう議論がありました。

耳で聞くだけでは何のことか分からない場合が多々ある。やはり目で字体を読むべきであるというので、片仮名で書くか、画数の多い漢字で書くかによって作者のキメ細かい感情を知ることができるというのは成るほどと思います。しかし目のみに頼るのは弊害も生じます。

もとは歌うということから詩歌が始まってきたのです。歌われるものを耳で聞き、そして共に同感しあうということを本来とするので、ちょっと音楽に似たものを持っています。

耳で聴いて分かるのはリズムがあるからです。リズムは人間の感情の波であります。喜怒哀楽の感情を説明抜きで我々に伝わってくるのは言語のリズムが示してくれるのですから、やはり目のみではなく十分耳で楽しく受け取れる作品であって欲しいと私は思うのであります。近来若い世代の人はこういう点で惑うていて、とにかく刺激の強いようにと難解なお化けのような句に誘惑されがちであります。

14.
日本語のような不完全な国語はない、とよく人から言われます。それはその通りだと思います。決して完全な意味を伝えられません。

例えば。「ヒ」という音です。これは太陽の日を指せるし、明かりの灯を指せるし、時間の日を指せるし、反対に氷の冷たい氷にもなり、水を通す樋や物を織る梭にもなるので、漢字の力を借りて少しは区別をつけています。このように曖昧で分かりにくい言葉を我々は平気で使用し、案外のんきに黙っていられるのはなぜでしょう。

それは想像力が発達して、その意味の的確を探りつかめるからだと思います。

極端かもしれませんが、無言は多弁とも言います。素晴らしい想像力を働かせることです。

只十七字の短い俳句、不完全な言葉の十七字詩は仮に千万言費やしてもいい尽くしたと言う感じが起こらぬものです。しかし心が引かれて深いものに触れた気持ちが満足を与えます。

言う人の生命が言葉に宿るからでしょう。言葉はリズムを出して微妙な感情を伝えます。句作者は感情と言葉とのリズム（ひびきあいの一致）を工夫したいものであります。

15.
半月ほど日本を離れてインドという異郷に触れてみた。

インドは日本と違って広い国である。常夏の国と聞いていたが、昼は暑くて夜急に冷えたので驚いた。自然の風物は一月であったから日本のように枯野という光景ではあったが、ブーゲンビリアとかハイビスカスとかが真っ赤に咲いているし。孔雀とかインコとか色彩に富む珍鳥が飛んでいるしして非常に変化していることをはっきり身に感じた。

一年中の変化を研究すれば興味もあるであろうが、しかし日本の風土のような正しい時候の変遷を見ることが不可能のように思うのであった。

日本という気候風土が自然に俳句という詩を生み出したもので、そういう自然を賛美するために、我々日本人の血の中に詩質を受け継いでいるのであろうかと自信し得るようになった。

私は日本人の旅行者としてインドの句を多く作った。それは結局日本人という立場にある感覚であるから、永住するインド人から見ると見当違いしていると思う。致し方ないと思う。

私は日本に帰って水のありがたさを知った。この風土この季節を心から感謝すべきである。

2024.02.22